まちなみ・まちづくり瓦版

會津復古會

士道遥かなり

早乙女貢

どこの国にも、また民族にも、先人の口碑、伝説の類いがある。偉人・英雄伝説は俗耳に入り易い。近代は権力が罪悪の隠蔽の為に偉人を捏造し、行跡を歪曲して伝承させる。

まだ百四十年しか経っていないが、幕末に於ける偉人、英雄伝説がそれである。明治以降の政府と御用学者は戊辰戦争の勝利者たる薩摩や長州などの、たとえば伊藤博文や山県有朋、大久保利通、高杉晋作その他のなかまたちを百年にわたって祭り上げて来た。

その虚像の化けの皮が剥がされてきたのは近年のことである。勝者の作った歴史が、如何に欺瞞に満ちていたことかが、漸く明らかにされてきた。歴史の真実は、敗者の中にこそある。近時、幕末の真相を語るものとして敗者たる会津藩と新選組がクローズアップされてきたのは、蓋し当然である。

三十余年にわたって「会津士魂」（正・続二十一巻）を書き続けてきた筆者にとっては、ここへ来て、やっと世間の蒙が啓かれたか、という気持ちだ。会津藩士の苦衷と正義が、漸く認知されるだろう。

人間、義の為に死を省みないことほど美しいものはない。仁・義・礼・智・信の五行は時代がどう変化しようとも、人間が人間である以上、必須の道徳である。信なくば立たず、仁なくば行わず。敗戦後、日本に対して中国の要人は「怨みに報いるに徳を以ってす」と宣言し、一切の賠償の請求権を放棄した。国際法により日本は中国に対して賠償責任はなくなっている。ここに儒教の精神がある。日本の武士道も淵源は儒教に発している。

明治政府の功臣たち薩長の奸悪な連中には、この仁も徳もなく、会津藩と新選組に仮借なき斧鉞を下した。士道に生き、誠意を尽くした人々が敗者の苦難に呻吟することになった。武士は勝敗に岐れるとも相見互い、というのは私心なく誠忠なるがゆえである。成り上がり者は、その士道すら知らずにたけり狂った。その妄念が軍国主義に突っ走り、侵略者の汚名に今日、なお国民が苦しめられている。

眞善美　武士道の碑

會津復古會は昭和四十六年九月二十日、老舗十八の株人仲間を以て旗上げをしました。平成十七年九月、設立三十五年を記念し、会津の心を後世に残し世界に発信すべく、会津士魂二十一巻を書き上げた直木賞作家早乙女貢先生が揮毫された「武士道」の碑を鶴ヶ城北出丸入口に建立しました。台石は外濠の角石で、博労町の豪商で茶人の磯部常松翁が庭の休み石として使われていた貴重な遺物であります。

會津復古會

會津若松　相談役　博物館　白虎隊記念館
同　大肝煎　上菓子　會津葵
同　肝煎頭　會津木綿　山田織元
同　副頭　輪箱飯　田季野
同　副頭　漆器　鈴木屋利兵衛
同　勘定方　竹細工　竹藤
同　肝煎　地酒　末廣酒造
同　肝煎　鰻　丸ぴや

老舗　會津復古會

會津若松　肝煎　桐箪笥　會津松本
喜多方　肝煎　餅　山中餅屋本舗
會津若松　目付　飴菓子　長谷川五郎兵衛
塩川　目付　九重　奈良屋
喜多方　職人　麺　はすぬま
喜多方　職人　地酒　小原酒造
會津若松　職人　力俥組　會津松五郎

儒教、朱子学に学ぶ商人道

会津松平藩の祖、保科正之公は江戸の儒学者、山崎安斎の薦めにより愛弟子横田俊益を会津に招き「忠孝」を藩教育の柱としました。寛文四年（一六六四）俊益は若松、桂林寺町北端に学問所、稽古堂を建て、武士、町人の別無く志のある者に学問を教えました。

最初、士農工商の別なく机を列べて学んだ稽古堂からのちに、新に武家の子弟を教育する郭内講所がつくられ士庶が分けられ、やがて武士道の殿堂、会津藩校、日新館が誕生いたします。

会津教学によると、生まれたばかりの赤子の時期は清浄無垢であったのに、長じてその心が濁るのは私利私欲によるものであるから、私を捨て、公を先に考えて行動せよとあります。「理論をつくして、しかる後に実践せよ」これが朱子学であります。「ならぬことはなりませぬ」「士魂商才」「真、善、美」會津復古會の商人哲学は、ここから生まれました。

會津復古會は昭和四十六年九月二十日に発会した、酒、漆器、菓子、料理、織物、桐箪笥、民芸細工など、会津の長い歴史と文化を守る伝統産業の名門、老舗の仲間組織の協同組合であります。

協同組合　會津復古會
事務局　会津若松市追手町四－十八
電　話　〇二四二－二六－五五五五